
メタル・トゥルーパー

灰色 改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メタル・トゥルーパー

【Nコード】

N2826S

【作者名】

灰色 改

【あらすじ】

西暦2050年、連合政府と、「エターナル・アース」の戦争は、開戦から5年目をむかえようとしていた。そんな中、元連合軍兵士の主人公、久遠飛鳥は、沖縄で退屈だが平穏な学生生活をおくっていた。だが、謎の銀髪の少女との出会い、そして、「エターナル・アース」による攻撃によって、彼の平穏は打ち碎かる。

戦闘のさなか、謎の少女シルヴィアを守るため、飛鳥は再び、戦士として銃を持つ。しかし、彼には人を殺せない理由があった。

(メタル・トゥルーパー(略称MT))とは、本作品中の人型機動兵

器のことです。
(

1章 穏やかな日に

「シンシアー!、…あ」

目が覚めると、くすくす、という笑い声が周囲から聞こえ、教壇のアン先生は、あきれたように溜息をついていた。

「…久遠君、またですか…」

久遠君とは俺のことで、またとは、俺が居眠り兼、寝言絶叫の常習犯だからだ。

「おーい、飛鳥。シンシアっていったい誰なんだ? お前の昔の彼女か?」

後ろの席から、冷やかしの声が飛んできた。飛鳥というのが俺の下の名前だ。

「…お黙りなさい。後藤健二」

しかし、すぐにそれはアン先生に一蹴されてしまった。

「…久遠君、早く座りなさい」

ギロっと、先生に睨まれた。俺の脳裏で一瞬、白髪のアン先生と白い蛇のイメージが重なった。

「はい、先生。すみませんでした」、

立ち上がって寝言を叫んだ俺が座ると、先生は授業を再開した。俺に集まっていたクラスメイトたちの視線も、ちらほらと前を向き始めた。

「それで、通称、MTメタル・トゥルーパーと呼ばれている、これらの人型機動兵器です…」

ここ、那覇工業高等学校は、先進的工業技術を教える学校だ。将来は軍の技術部に進む生徒も多く、最先端の軍事技術を学ぶ講座もあって、

ちょうど今の時間がそれだ。

「…現在、連合軍は、MTのエンジンとしてファントニウムリアクターエンジンを使用していて、これは…」

アン先生の単調な説明が続く。時刻はお昼時の12時過ぎで、暖かな五月の日差しは俺の眠気を再び誘っているかのようだった。

「…ねえ、そのシンシアさんって、いったい誰？よく、あなたの口から聞くんだけど」

押し殺した声で、隣の席のレイラが尋ねてきた。金髪の彼女は、真面目な優等生タイプで、授業中にこうして話しかけてくることは珍しかった。

「誰って…」

俺の脳裏に、彼女の顔が浮かんだ。笑った顔、怒った顔、泣いた顔…、だが、どれもすぐに消え失せ、残ったのは死ぬ間際の、笑みを浮かべた顔だけだった。

「…古い仲間だよ。とっても大切な」

俺は、それだけしか答えられなかった。

「…」

「…であるから、このエンジンは…。久遠君」

唐突に、先生は俺の名前を呼んだ。俺の意識は現実に戻された。

「また、ぼんやりして。眠気覚ましです、ファントムリアクターエンジンの長所を述べなさい。教科書を見ずにです」

どうせ分からないでしょ、と先生の顔には、そう書いてあった。先生なりの、授業態度の悪い生徒に対する罰のつもりだったのだろう。

「長所なんてありません。むしろ重量のあるリアクターエンジンでは、MTの機動力を殺すだけです。MT以外の、まあ、戦艦にでも搭載すれば、長期稼働できるリアクターエンジンは有効かもしれないかもしれません」

「…もう結構です」

俺の実体験に基づく回答は、途中で先生に遮られてしまった。ポ

キッ。先生の手の中のチョークの折れる音がした。いや、先生がチョークを折る音か。先生の手が小刻みに震えている。

「久遠君、まだ寝ぼけているみたいですね。顔を洗ってきなさい」
先生の声は、やっとのことで怒りをこらえたような感じのものだった。

「でも、先生まだ授業中です」

俺の隣の席のレイラが、口をはさんだ。

「ブルックナーさん、彼は、まだ寝ぼけているんです。顔を洗って目を覚ます必要があると思いますか。彼は私の質問に答えなかったばかりか、

どこかで仕入れてきたかは知りませんが、よく理解もしてないようなことを知った顔でべらべらと…。その教師をなめきったような態度、まったくもって不愉快です」

先生は、キッパリと言い切った。

「…先生、それは…」

「先生、顔を洗ってきます」

続けようとしたレイラの言葉を遮って、俺は教室から出ていった。

1章 穏やかな日に（後書き）

こんにちは、灰色改と申します。読み方はそのままです。

この第1章は、原稿用紙で5枚分と大変短いのですが、書き上げるのに1週間もかかってしまいました（＜―＞）

小説を書くのって、思ったよりもずっと大変でした。でも、それ以上楽しかったです。

最後に、こんな拙文をお読みいただき、ありがとうございました。もし、よろしければ、次回もおこし下さい。

2章 ある少女との出会い

「よく理解もしてないことか…。」

俺が前線でMTを乗り回していたと知ったら、あの先生はどんな顔をするだろうか。

「…きつと、目を丸くするだろうな」

アン先生の狼狽ぶりが想像できて、俺は思わず笑ってしまった。ザバーン、冷たい水が顔に当たって気持ちよかった。皐月晴れの今日は、温かいというよりむしろ少し暑いぐらいだった。

「あと、10分で昼休みか…」

そろそろ戻らないとなあ、と思って、俺は最後にと、もう一度、冷たい水で顔を洗った。

袖口で水気を払って鏡を見てみると、少し寝ぐせの残った黒髪で、紅い目を眠たげに細めた顔が写っていた。

「…そういうえば、今日の朝は忙しくて鏡を見てなかったな」

俺は、寝ぐせを直しておこうと思って、鏡に写った自分の顔に集中した。そのとき、俺の後ろを通過しようとした美少女の横顔が写った。

「シンシア…？」

あわてて振り返ってみると、銀髪を短く切った少女の後ろ姿が見えた。

「…気のせいだよな」

俺の記憶の中の彼女は、ブラウンの髪を持ち主だった。…それ以前に彼女はもう、この世にはいないのだ。

あの銀髪の少女の雰囲気、シンシアのと似てたから間違えたのかな、と俺は思った。

その銀髪の少女は、立ち止まって、こちらを向いた。

肩口で切りそろえられた白銀の髪、どこまでも見通すように澄んだ、意志の強そうな蒼い目、整った顔立ちをした彼女は、100人

がすれ違えば、100人ともが振り返ってしまうような美貌の少女だった。

「お前、私に何か用か？」

彼女の口調は、その容貌とはまったくかけ離れた、男勝りの威圧的なものだった。

「…」

「さっき、お前の横を通ったときに、お前、私に何か言わなかったか？」

俺が言葉に詰まっていると、彼女は畳みかけてきた。

「…いや、制服じゃない人が校舎内にいるのに驚いてしまった」

俺は、とっさに思いついた無難そうな答えを返した。実際、彼女は白色のスーツとズボンという、学校の中では場違いな格好だったのだ。淡い赤のネクタイが白色のスーツによく似合っていた。

「…そうか」

彼女は納得したようだった。

「…ところで、お前はここの生徒だな？」

「そうですけど」

制服姿の俺は、そう答えるしかなかった。俺がここの生徒でなくてもイエスと答えさせただろう、そんな威圧感を彼女は持っていた。

「…ならちようどいい。片岡博士のラボはどこだ？」

この威圧的な美少女も結局はただの迷子だと分かって、俺はほっとした。

「…ええっと、校舎の案内図とか持ってる？」

うちの学校は構造が複雑で、初めて来た外部の人なんかは、たびたび道が分からなくなってしまうのだ。それゆえ、俺もそうした人たちに道を聞かれることには慣れていた。

「ああ、拔かりはない。司令部から渡されている」

「…司令部？」

「…なんでもない気にするな」

彼女は、慌てて否定した。

俺は渡された案内図を使って、彼女に道を説明した。

「今、君がいるのが2階のこちらへんで、片岡博士のラボは1階のここで、まずは、この階段を下りて…」

「…なるほど」

気づくと彼女の顔が俺のすぐ隣、そのまつ毛の1本1本が数えられそうな距離にあった。

彼女は、そのことに気づいていないみたいで、その目線は俺の手の中の案内図に集中していた。

横目で見ても彼女の顔は端正で、俺の心臓の鼓動は、まるで早鐘のように鳴っていた。

「…だいたい分かった。感謝する」

彼女の顔が俺の方に顔を向いた。至近距離で、俺たち二人はお互いの顔を見つあう形になってしまった。彼女の目は一瞬驚いたように大きく見開かれたが、すぐにそれはきつく細められた。

「…返せ」

彼女は乱暴な手つきで、俺の手から案内図を奪い取った。

「…その、ごめん」

「…」

彼女は、俺とは目も合わせたないとばかりという表情をしていた。

「…その、決してそういうつもりじゃなくて、これは不幸な事故というか…」

俺は、必死に言い訳を試みた。

「…ありがとう」

少し照れた感じで彼女は何かを言った。しかし、囁くような小声だったので、俺は聞き取れなかった。

「…今、なんかいった？」

「なんでもない！」

彼女は、突然頬を真っ赤に染めて怒りだした。俺は、彼女の怒った理由がまったく分からなかった。

「…俺、なにか、君の気に障るようなこと言ったかな？」

我ながら名案だと思った。これなら、彼女は何に気に腹を立てるか分かるし、俺も彼女の怒りの原因が分かったら対処のしようもあるというわけだ。

「…」

理解できないものを見るような目で、彼女に一瞥されてしまった…。俺は、美少女に冷たい目で見られるというすざましい精神的ショックを味わった。

「…」

無言のまま、彼女は立ち去ろうとした。

「…待って、そっちら行ったら遠回りに…」

彼女は、俺の教えた道とまったく正反対の方へ進もうとしていたのだ。

「…うるさい。もう、私に話しかけるな！」

彼女は叫んで、やはり間違ったままの方向に走り去ってしまった。

「あ、待って。だからそっちは…」

「キーンコーン、カンコーン」

そこで、予鈴のチャイムが鳴った。

彼女の相手をしていたせいで、俺は教室に戻ることをすっかり忘れていた。今更、気づいても後の祭りだなと、俺は思った。

3章 終わる日常

昼休みの教室は閑散としていた。この学校の生徒の大半は寮住まいで、弁当を作ってもらえない彼らが食堂や購買に殺到するからだ。さらに、今日のような天気の良い日は、弁当持ちの生徒の多くも屋外で昼ご飯を食べていた。

そんなわけで、教室に残っていたのは、レイラ・ブルックナーと、それから悪友の後藤健二だけだった。

「…、お前って本当に鈍いやつだな」

俺が、さっきの女の子のことを話すと、後藤健二はあきれたように呟いた。そこらへんの悪ガキを大きくしたみたいな風貌の彼は、俺の下宿先の大家さんの息子で、俺とはごく親しい間柄だ。ちなみに俺の弁当を毎日用意してくれるのは、彼のお母さんだ。

「ふーん、そんなことがあったんだ」

レイラは不機嫌そうな顔をしていた。いつもは騒がしいぐらいに喋る彼女だが、俺がさっきの話をしてからずっと黙り込んでいた。

「レイラ、どうした？調子が悪いのか？」

心配だったので、俺はレイラに尋ねた。

「…別になんでもないわよ」

口ではそう言っても、レイラは相変わらずのむすっとした顔をしていた。

「まあ、仕方ないさ。朴念仁のお前が女の子の話をしたんだから、レイラが気になるのも…、痛え、なにするんだよ」

健二は踏まれた足をさすった。踏んだ張本人のレイラは、顔を少し赤らめて窓の外を見ていた。

「…昼のニュースでも見ようぜ。なんか、おもしろいことがあったかもしれないし」

健二が気分転換とばかりに、教室のテレビを勝手に付けた。時たま授業で使うテレビのリモコンは、彼の私有物と化していた。

「…次のニュースです。2日前から続いた『エターナル・アース』による攻勢によりフランクフルト基地が陥落し、連合軍欧州方面軍は、

ドイツ全土からの撤退を表明しました。欧州方面軍の発表によりまずと、一連の戦闘での戦死者は1452名、負傷者は5000人以上に上り、また、多数のMT及び

戦車が破壊されたとのことです。この事態に対し、欧州方面軍のシューンベルク中将は、先ほど急遽の記者会見を開き、そのなかで…」
遠くから戦闘の様子を映した映像が、軍服を着た初老の男性が記者会見をしている映像に切り替わったところで、健二はテレビを切った。

「あーあ。ろくなニュースがやってないな」

健二は、もうたくさん、とばかりに呟いた。

「…仕方ないでしょ。外の世界は戦争をしているんだから」

外を眺めていたレイラが、会話に復帰した。彼女の言うとおり、世界は、連合と『エターナル・アース』の二つの陣営による戦争状態にあった。

「…外の世界か」

彼女の言うとおり、平和な沖縄にとって、戦争は外の世界の出来事かもしれないなかった。

「…飛鳥？」

俺は、無意識のうちに黙り込んでいたようで、レイラが俺の顔を覗き込んでいた。

「…なんでもないよ。それよりさ、アン先生のことなんだけど…」
俺が教室に戻ったときには、先生の姿はすでになかった。なので、俺はアン先生がどうしたのか非常に気になるところだった

「そりゃ、お前が帰って来なかったんで、あのばあさん、相当お怒りだったぜ」

「…そうか」

特に、呼び出し等もないと分かったので、俺は安心した。

「そうかって、あなた、アン先生に反抗しすぎよ。まったく、テストで点を取れなかったら、即落とされるわよ」

実際、レイラに心配されても仕方がないぐらい、俺の授業態度は悪かった。さっきの一件も、ほんの氷山の一角に過ぎなかった。

「そうそう、飛鳥、お前はなんでMTに関して、その…、そんなにも反抗的なんだ？」

「…仕方ないだろ。はつきし言って、アン先生の、MTに関して教えてる部分は間違いだらけなんだから」

レイラと健二の問いに、俺は答えた。

「間違えだらけて、どういうことだよ？」

「例えば、さっきの授業のリアクターエンジンだろ。それから、前の授業の脚部駆動システムに…」

「ふんふん、それで」

まったく分かりません、という顔で、健二は相槌を打った。

「…そもそもMTに関しては、『エターナル・アース』のほうがいいに進んでいるのが事実だ。それ以前に、連合軍は、MTを戦車代わりではなく、機動戦力として考えるべき…」

「はいはい、そこまで。軍事オタクさんは黙って飯を食う」

口の中をくちゃくちゃさせている健二には言われなくなかった。

「健二、君こそ口の中のものを…」

そこで、俺の時間が停止した。快晴の空を横切って、飛んでくる細長い物体。それは戦争をしている外の世界の産物だった。

「伏せろー！」

まるで目の前に雷が落ちたかのようなものすごい音がして、直後、背中を爆風が通過していった。目の前の校舎にミサイルが直撃し、爆発炎上した。

「大丈夫か？」

俺の腕の下の二人は、呆然としていた。ミサイルの着弾の寸前に、俺は二人を押し倒してかばったのだった。

「…おい、しっかりしろ」

「…今の何？」

さきに我にかえったのはレイラだった。彼女は、俺の手を借りて立ち上がった。

「ミサイル攻撃を受けたんだ。次弾が来るかもしれない、早く避難しないと…っう」

俺の背中に痛みが走った。

「…飛鳥、背中にガラスが…」

レイラは、言葉に詰まり、泣き出しそうな顔をした。

背中に手をまわしてみると、たしかに左肩の少し下ぐらいのところにガラス片が刺さっていた。

「…そうみたいだな」

レイラの動揺ぶりに対し、俺はいたって冷静でいられた。この程度の怪我など、過去に負った怪我に比べるとものの数にも入らなかったからだ。

「とりあえず、早く逃げないと…、健二、しっかりしろ」

気づくと健二は、顔を真っ青にして座り込んでいた。まさか、爆発音でショックを起こしたのか。

「…しっかりしろ」

俺は、彼の肩を思いっきりゆすった。すると、彼はしばらくせき込んで、そのあと、ごくんと何かを飲み込んだ音がした。

「…助かったぜ。さっき、食ってたものが喉につまって死ぬかと思った」

心配して損するとは、こんな場合を言うんだなあ俺は身をもつて実感した。

「…とりあえず、大丈夫そうだな。さあ、早くシェルターに逃げよう」

この時代、有事に備えて多くの学校にシエルターが作られていた。

「飛鳥、お前の背中…」

「…ガラスがささってるんだろ」

健二は絶句した。

「…これぐらい大丈夫だ」

「…でも、お前背中にものが…」

いらいらしてきた。レイラにしろ健二にしろ、この程度の怪我でいちいち心配のしすぎだ。

「…だから、なんともないって言ってるだろ。それよりも早く…」

「何がなんともないよ…」

レイラは涙声で叫んで、そして俺を睨んだ。

「…レイラどこか痛むのか？」

彼女は、俺が気づいてないだけでどこかを怪我してるのかもしれない。なかつた。

「…痛むって、それはあなたでしょ。…健二、着てるカッターシャツを脱いで」

「…なんで？」

言われた健二は、不思議そうに聞き返した。

「…いいから、早く！」

有無を言わせない彼女の言葉に、結局、健二は逆らえずシャツを脱いで、レイラに渡した。彼は、なぜかシャツの下にキャラクターもののTシャツを着ていた。

「健二、そのTシャツ…ははははは」

「うるせえ、ひとの趣味にけちつけるな」

健二は、恥ずかしそうにキャラクターの絵柄を手で隠していた。

「…飛鳥…。覚悟はいいかしら？」

いつの間にか、レイラは俺の後ろに立っていた。しかも、彼女は全身から嫌なオーラを漂わせていた。

「…あのレイラさん…いったい何をなさろうと？」

「…大丈夫よ。痛いのは一瞬だから♪」

俺は慌てて、こういうときは抜かないほうがいいんだ、と制止を試みたが、時すでに遅しかった。彼女は力任せに、俺の背中にささっていたガラス片を引き抜いてしまった。

「…っうう」

さっきとは比べ物にならない激痛が、俺を襲った。俺の背中からは、湧水のように血があふれ出ていた。

血を見たからだろうか、きゃあ、と悲鳴をもらして、レイラは気を失ってしまった。

「…健二、俺の背中^{カッターシャツ}の傷口にそのシャツを巻いてくれ、急いで」
呆然と俺を眺めていた健二は、弾かれたように頷き、気絶したレイラが握ったままのシャツを手を取った。

「…どういうふうに巻いたらいいんだ？」

健二の声には、彼の不安げな気持ちが混ざっていた。

「…傷口を覆う感じなら、どんなんでもいい」

「おお…」

俺の背中に、臨時の包帯^{カッターシャツ}を巻いていく健二の手は震えていた。

それでも、健二はいちおう巻き終えてくれた。暑いときにジャージの上を腰にまくことがあるが、あれの肩下バージョンみたいになってはいたが…。

しかも、レイラは、俺のシャツを脱がさなかったもので、俺は、シャツの上にシャツを巻いた暑苦しい格好になっていた。

「…ありがとう。これで、じきに血は止まらと思う」

健二はしばらく俺の顔をじっと見つめて、俺のでこに手を伸ばしてきた。

「…熱はないみたいだな」

「…その手を離してくれ」

男に手で熱を測られるのは、お世辞にも気持ちのいいものではなかった。

「いや、悪い。さっきから、お前がおかしいから、熱でもあるんじゃないかと思って」

「…俺がおかしい？」

「ああ、背中にもものが刺さっていたのに落ち着いていたし、…それ以前に、なんか、いつものお前と感じが違うというか…」

そう言われて、俺は、自分が無意識のうちに、昔の、兵士だったころの自分の感覚になりつつあることに気付いた。

「…とにかく、今はシェルターに行こう。次の攻撃が…」

「…来ない？」

一発目のミサイルの着弾があってから、もうじき五分が経とうというのに、ミサイルはおろか銃弾一発、飛んで来なかった。

どうしてだ？なぜ、何もこない？敵の、『エターナル・アース』の目的は？

「…まさか、敵の狙いは！」

俺は、急いで窓に駆け寄った。ちょうど、そのとき、鼓膜が破れそうになるぐらい大きなプロペラ音がして、目の前を緑色のヘリが降下していった。

俺の予感は的中だった。

「…おい、飛鳥。敵の狙いって何なんだよ？」

「この学校の占拠だ、おそらく」

最初のミサイル攻撃は威嚇で、おそらくあのヘリの歩兵部隊が本命だろう。

「…うかうかしてたら、銃撃戦に巻き込まれ…」

そこまで言いかけて、俺の思考は停止してしまった。…あの子は、さっき出会った銀髪の子は？彼女は どうして？

幸いにも、彼女の言っていた片岡教授のラボのある研究棟は、俺達のいる棟の後ろにあった。

30分も前のことだ。もう、彼女は教授のラボに着いているはずだ。ラボは1階にあるし、教授もいるんだからすぐにもシェルターに避難できたはずだ。

でも、もし、また迷子にでもなっていたら。あるいは、教授が留守だったら。あたりに頼れる人もなく、爆発音に怯えていたら…。

俺が、無力だったから、助けられなかったあの子シンシアの顔と、先ほどの銀髪の少女の顔が、また俺の脳裏で重なった。

「…飛鳥？」

健二の声が聞こえて、俺は我にかえった。そして、そのときにはすでに俺の決心はついていた。

「…ごめん、健二。レイラを頼んだ。俺は、さっきの子を探してくる」

「頼むって…、お前も怪我を怪我してるだろ。探しに行くなら、俺が…」

「…いや、健二はレイラを頼むよ。あの子に会ったのは俺だし、それに…」

俺は戦鬪のプロだ、と心の中で俺は呟いた。

「…分かったよ。そのかわり、レイラが目を覚ます前に返って来いよ」

うう、と俺は思わず、うめき声をもらしそうになった。もし、俺がいなかったら、レイラがものすごく怒りそうな気がした。

「…行ってくる…っう」

背中が少し痛んだ。俺は、レイラが目を覚ます前には返ろうと心に強く誓って、教室を後にした。

3章 終わる日常（後書き）

あいかわらず、文章力はひどいままで（；――）
でも、がんばります！

4章 再会

「教授、しっかりしてください。教授」

銀髪の彼女、シルヴィアは、頭から血を流して横たわった片岡教授に必死に呼びかけていた。

「…シルヴィア君。私はもう駄目みたいだ…」

『エターナル・アース』によるものと思われるミサイル攻撃があつて、彼はそのときの爆風で飛んできた花瓶から彼女をかばつたのだ。

「…あれのこと頼みましたよ。絶対に奴らの手には…」

教授はゴホッと血を吐いて、そこで事切れた。

「分かりました、教授。絶対に奴らから、あれを守ってみせます。

…さようなら」

彼女は涙を堪えて教授の亡骸に別れを告げ、主のいなくなったラボを飛び出した。

「もう、いったいどこなのよ。第三倉庫って」

廊下の壁をたたき、彼女は悪態をついた。ラボを飛び出したものの、また迷子になったのだ。頼みの綱の案内図にしても現在地すら分からなくなってしまうた彼女には、無用の長物でしかなかった。

しかも、片岡教授のラボは、この学校のなかでも人気の少ない研究棟にあって、彼女は先ほども、誰一人とも出くわさなかった。また、彼女の知るよしもないことだが、このとき大半の生徒と教職員はシェルター目掛けて

殺到中で、研究棟に行こうという者などいるはずもなかった。

せめて、さっきの男の子みたいに道を教えてくれる人がいたら…、彼女はそう思わずにはいられなかった。

「…て、何よ。あんなデリカシーのない男の子のことなんて思い

だして。あんな朴念仁なんか頼るなんて、こっちからお断りよ…」
彼女は、自分が少し火照っていることに気付いた。

「…とりあえず落ち着きなさい、シルヴィア。こういう状況下では、まず冷静さを失ったら駄目よ」

彼女は、自分に言い聞かせた。

とそこで、こっちに向かって走ってくる靴音が聞こえた。

「誰か、こっちに来る…」

その事実は彼女にとって、救い、そのものであった。

だが、彼女は、手近な柱の陰に身を隠した。向かってくるは敵兵かもしれないからだ。

「敵兵だったら、射殺するしかない」

彼女は、懐の自動拳銃を取り出して、息を潜めた。

やがて、靴音が近づいて来た。訓練を受けた人間のものとは思えないほど不用心な走り方だったが、それでも油断は禁物と彼女は自分に言い聞かせた。

言い聞かせた。

靴音の主が、ちょうど自分の横を通りかかろうかというタイミングで、彼女は飛び出し、銃口を突き付けて叫んだ。

「止まれ、武器を捨てろ！」

「止まれ、武器を捨てろ！」

初め、何かの悪い冗談だと思った。気になって探しにきたその少女に銃口を突き付けられ、そう命令されたのだから。

とりあえず、俺は、誤解を解かねばと思った。

「まってくれ、俺は君の敵じゃない」

「…お前はさっきの」

彼女も、俺のことを覚えていてくれたのか、安堵したみたいに銃口を下げてくれた。

「ちょうどいい、お前、第三倉庫はどこだ」

「第三倉庫って、今はそんなことより…」

とそこで、俺の全身を悪寒が走った。この、誰かに狙われているような感覚は、殺気だ。俺は慌てて、目の前の少女を彼女がさっきまで潜んでいた柱の陰に押し込んで、

俺自身もそこに隠れた。直後、機関銃の発射音が聞こえ、さっきまで俺達のいたところを、無数の弾丸が通過した。あと一瞬でも気づくのが遅れてたら、

二人とも蜂の巣になっていただろう。うつ、急な運動をしたからか、俺の背中を鋭い痛みが走った。

「…何するのよ」

柱の陰に隠れた俺達二人は完全に密着状態で、彼女は見るからに狼狽していた。

「その銃貸りるよ」

俺は、彼女の手から黒光りする銃を奪い去って、柱の陰から飛び出した。二十メートル前方に敵兵が二人。ともに迷彩服の上に、黒い防弾チョッキを着ていた。

彼らはこちらが飛び出してくるとは想定していなかったらしく、驚いた表情を浮かべていた。おー、と叫びながら、俺は、続けざまに二発撃った。

ううっと、悲鳴を発し、彼らは構えていた機関銃を手放した。俺の銃弾は、的確に彼らの右肩を撃ち抜いたのだった。

ううっ、思わず叫びたくなるような痛みが、俺の背中を襲った。

しかし、とどめをささなくてはならない。俺は背中中の激痛に耐えながら、右肩を押さえて座り込む敵兵二人の腹に、傷口にひびかない程度の、それでも渾身の拳をきめた。短い悲鳴を残して、二人とも気を失った。

「…お前」

後ろを振り向くと、彼女は信じられないという顔をしていた。民間人の少年が軍人二人を倒したのだから、当然の反応だろう。

「さあ、とりあえず安全なところに避難しよう」

俺は彼女の手を引いて、走りだそうとした。だが、そのときまで自失状態だった彼女は俺の手を振り払った。

「何するんだよ、早く逃げないとまた敵兵が来るぞ」

苛立ちまじりに俺は叫んで、彼女の手をまたつかんだ。

「駄目だ。私には、やらなくちゃならないことがある」

「やらなくちゃならないことって、何だよ？そんなに大事なことになるのかよ？」

「…お前には関係ない」

コンクリートがへこむ音がした。俺が、怒りにまかして右の拳を壁にたたきこんだからだ。

「…関係ないって、この状況で…」

よく言えたなと続けようとしたが、彼女の戸惑ったような顔を見て、俺は言えなくなった。…そのその、勝手にやってきて、勝手に巻き込まれたのは俺だ。

なのに、俺はまるで彼女のせいで巻き込まれたと言わんばかりに、怒っていたのだった。穴があったら、潜り込みたいぐらい恥ずかしくなった。

「…とにかく、お前には関係ない。お前は、怪我をしているだろう。お前だけで早く避難しろ」

急に黙りこんだ俺に、彼女はやはり戸惑った声で言ってきた。早く避難しろか…、この変に男口調の少女は、彼女なりに、俺のことを心配してくれてるのかもと、ふと思ってしまう。

だが、もし俺が彼女を見捨てたら、彼女はどうなる？彼女は、道も分からず、武器はというと、機関銃に対し、はるかに威力の面で劣っている自動拳銃しか持っていないのだ。

「…俺、久遠飛鳥っていうんだ。君のその『やらなくちゃならないこと』に付き合うよ」

背中相変わらず鋭い痛みを発していて、それはどんどんひどくなってるみたいだった。俺の血は、間違いなくこの瞬間も少しずつ体から失われているだろう。

死という言葉が、俺の脳裏に浮かんた。しかし、それでも彼女を見捨てたら、きっとそれ以上に後悔する。

「しかし、その怪我では、足手まといだ」

凶星だった。俺は、激痛でいつ、意識を失うとも分からない状態だった。

「…もつともなご意見だが、君一人で、なんとかなる状況か？」

「…、それは」

彼女が逡巡するのは、俺の問いに対する答えが否定だからだろう。

「…だったら、俺は君に協力する。…その君の名前は？」

彼女は、それでも、しばらくは考えこんでいた。

「…私は、シルヴィア・ハーデンスよ。その、あり…、協力感謝する」

やがて、複雑そうな顔はしていたが、彼女は納得してくれた。

「今、『よ』って言った？もしかして、その男口調って…」

「…気のせいだ」

「無理して…」

「絶対に気のせいだ」

二回目に関しては、もはや叫び声同然だった。シルヴィアの顔はゆでダコのように真っ赤になっていた。

「…とにかく、協力してくれるんだろう。だったら、第三倉庫まで案内してくれ」

「ああ、分かった」

俺は力強くうなずいた。

4章 再会（後書き）

やっと、アクションシーン（；――）

断章

遡ること数分前。

エターナル・アース軍所属、強襲潜水艦『カノープス号』内。

『カノープス号』の艦長、エルマー・スコット少佐は、落ち着かない心地でいた。艦長ともあろうものが冷静でないということはあってはならないことだが、それでも彼は、落ち着かないとばかりに、軍帽をいじっていた。

まもなく40代にさしかかろうという歴戦の彼をこうもさせるほど今回の作戦は、特殊なものだった。

ふと、彼は、自分の上官は今回の作戦をどう思っているのか気になった。

「中佐、今回の作戦ですが、本当に、民間の学校で連合が新型MTの開発をおこなっていると思いますか？」

彼の隣に座って、書類のようなものに目を通していた少女が、目を上げた。燃えるように赤い赤髪に、薄い青の瞳のその少女は、顔立ちこそ端正だが、

どこか冷たい感じがした。その赤い髪は、白色の士官服によく映えていた。

「司令部が確証もなく、部隊を派遣すると思う？」

答えたのはその少女だ。彼の上官、中佐とは、まだ10代にしか見えない彼女なのだ。

「はあ、しかし…」

「艦長、作戦前に士気を下げるようなこと言わないこと、いい？」

「は、以後気をつけます」

40過ぎの強面の海軍将校が、10代にしか見えない少女に敬礼している様子はどこかシュールだった。

「そろそろ、作戦の開始時間ね。艦長、対地ミサイルの発射準備

を」

「ミサイルですか……。攻撃目標とはいえ、民間の学校ですぞ」

「……一発だけよ、威嚇用のね。上は、連合の新型に興味があるみたいだから、ミサイルでまるごと吹き飛ばすわけにはいかないのよ」
艦長は胸をなでおろすとともに、寒気と薄気味悪さを感じた。

この少女は、自分と同年代の生徒のいる学校目掛けて、ミサイルを発射することに何のためらいもみせなかったのだ。

「ミサイル発射後、ブリューナク隊は出撃……」

ブリューナク隊とは、この少女、中佐直属のMT部隊のことだ。

「は、了解しました」

「……人の話は最後まで聞く。私も紅龍で出るわ」

紅龍は彼女専用のMTで、その名の通り全身が真っ赤の機体だ。

「……中佐直々にですか？」

「そうよ。艦長、あとのことはよろしく」

そう言って、彼女は席を立った。

「は、了解しました」

彼は、去っていく自分の上官に敬礼した。

まったく末恐ろしい子供だ、と思ったが、彼自身も上意下達が骨の髄まで浸みこんだ軍人であった。下された命令の即時実行、それは彼にとって最優先事項だった。

「ドボルザーク（対地ミサイル）装填用意。目標、那覇工業高等学校、撃て！」

断章（後書き）

お久しぶりです。今、高3やっていますW

ベテルギウスの胎動

「畜生、なんで追ってくるんだよ」

俺は、悪態をこぼしながら、追いかけてくる敵兵に発砲した。俺たちは、運悪くはち合わせてしまった敵の部隊に追われていた。10人規模の小隊で、全員が黒っぽい特殊格好――おそらく高アラミド繊維の防弾装甲――をしている。

さっきの2人と同じく、『エターナル・アース』の兵士だ。

俺は、シルヴィアの自動小銃を取り出したが、肩越しに狙いを定めるのは難しい。加えて、折からの背中への激痛で、指先が震えてしまう。弾は案の上、敵兵の1人の肩をかすただけだった。

外した直後、曲がり角に差し掛かる。敵の機関銃による連射で、廊下の壁が抉られ、銃痕だらけになってしまう。

隣を走っているシルヴィアは、はあはあ、と先ほどから息つきこそ荒いが、泣きごと一つ洩らさずについて来ている。

さっきからずっと重武装の敵に追われならぬの全力疾走が続いていた。普通の女の子なら、もう駄目とか言って座り込んでしまうところなのに、よく頑張ってくれてると思う。

「大丈夫か、シルヴィア」

「は…、は…。大丈夫だ…。それより、まだ…か」

口では、大丈夫だと言ってるが、呼吸は荒く、息をするのもつらそうだ。まだか、とは彼女の言っていた倉庫のことだ。

「あと少しだ。次の角を曲がったら、正面に入り口がある」

「は…、は…。振り切れそうか？」

それには、俺は首を横に振った。もう、目的地である倉庫まで距離がなかったし、撒こうにも隠れられる遮蔽物もなかった。もちろん、俺一人ならともかく、彼女もいる手前、走って逃げ切るのなんて論外だ。

「撒けないとまずいのか？」

「…ああ。それじゃ意味が…ない」

俺達がしゃべっている間も、敵の機関銃は嵐のごとく弾を吐き出していた。肩口をわずかに弾がかすった。ジグザグに走っているとはいえ、これまで弾に当たらないのは奇跡的だった。

。再び、狙いを付けて、銃の引き金を引いたが、やはり当たらない。お返しとばかりに、敵の機関銃がいつそうはげしく火をふく。これ以上は、運に頼ってたら危険かもしれない。

「…次の角を曲がったら、すぐに目を閉じて」

「…は？…分かったわ…了解」

慌てて、シルヴィアは言い直した。横目に彼女の顔を覗こうとしたら、そっぽを向かれた。

運命の曲がり角が近づいてきた。あと10メートルぐらいか。自分の学校の曲がり角が、命運は分ける場所になるとは…、なんとなくか笑えない冗談みたいだった。だが、今はそんな滑稽さを笑っている場合ではない。

俺は、ポケットからさつき手に入れた黒っぽい球体を取り出した。入手元は、先ほど気絶させた敵兵だ。

俺は先に行くと、シルヴィアに目配した。彼女は、頷いて俺の前を走って、そのまま角に差し掛かった。

シルヴィアが曲がり終わって、彼女の姿が見えなくなった。俺は、立ち止まり、その球体―スタングレネード―を背後の敵兵に目がけて思いっきり投げつけた。

あたり一面を、そこにだけ太陽が現れたような強烈な光が襲った。閃光がおさまってから、目を開くと、追ってきていた敵は全員、目を押さえて悶絶していた。これで、しばらくは動けないだろう。角の先で立ち止まっていたシルヴィアは、何か言いたげな顔をしていた。口にくそ出さなかったが、彼女の目は、お前は何者だ？と俺に聞いていた。

「…俺のことは、あとで話すよ。今は急ごう」

彼女は弾かれたように、頷いた。

第三倉庫は、人気の少ない研究棟のはずれにあった。さらに言えば、関係者以外立ち入り禁止になっていた、嚴重にロックもされていた。

そんなわけで、一部の生徒たちからは、軍の秘密兵器を作ってるだの、化学兵器の実験に失敗して閉鎖されたのだと、いろいろと噂される場所でもあった。

「着いたのはいいが、中に入るためのキーか何かもってるのか？」俺たちの前を、倉庫の分厚い鉄扉が塞いでいた。ロックを解かなければ、扉は開いてくれない。

問題ない、とばかりに彼女はカードキーを取り出し、それでロックを解除した。

ピーという電子音がして扉が開いた。倉庫の中は、天井までの高さが10メートル以上で、奥行に関しては100メートル以上あった。

学校の体育館と同じぐらいの広さだ。

「早く、入れ」

先に入ったシルヴィアに呼ばれる。俺が慌てて中に入ると、扉はまた、電子音を発して閉じた。

「なるほど、これなら、安全だな」

倉庫の床一面に工具が散乱していて、危うくつまずきそうになる。

「そっちじゃない。こっちに来い」

奥の方から、シルヴィアがまた俺を呼んだ。こけないように、細心の注意を払って奥まで行く。……そこで、俺は時間が止まったかのような衝撃を受けた。

巨人が立っていた。全長6メートル強の、人型を模したような鋭角的なフレーム。胸部の出っ張りにはパイロットを乗せるコックピツ

トだ。

特殊ローレンチウム鋼製の強靱な足がその巨体を支えていて、手に関しては指の関節までもが忠実に再現されていた。

そして、機体に施された青と白を基調とした塗装は、中世の騎士を彷彿させた。

メタル・トゥルーパー

「MT…」

思わず、独り言をこぼしてしまった。……まさか、本当に作っていたとは。そして、再び見ることになるとは。ショックが大きすぎたのか、頭がくらくらしてきた。

もちろん、失血の影響もあったと思うが。

「そうだ。これが、連合の新型MT、『ベテルギウス』だ」

上から、彼女の声が降ってきた。彼女は、いつの間にかコックピットに収まったらしく、MTを機動させようとしていた。

「…そして、私はこの機体のテストパイロット、シルヴィア・ハーデンス中尉だ」

青と白のMTの目に光が宿って、気を付けの姿勢で立っていた巨人が、腰をかがめ、手を伸ばしてきた。乗れ、ということらしい。

巨人の手のひらは俺一人乗るぐらい造作もなかった。

巨人の手は、俺をコックピットまで持ち上げてくれた。MTのコックピットは一人用だが、無理をすれば二人乗りができる。二人目は残念ながら、立ち席だろう。

「…脚部駆動系異常なし、システムオールグリーン」

操縦席に座ったシルヴィアは、機動準備をほぼ終えていた。

「…動かせるのか？」

「…無論だ。すでに100時間以上のシュミレーションをこなした」

と、そこで爆音とともに倉庫の壁に穴が開き、茶色の巨体が飛び込んできた。やはり、人型のフレームだが、この機体『ベテルギウス』

に比べると、どこか武骨な感じのするMTだ。頭部の一つ目が、生

理的な気持ち悪さを感じさせた。

「リゲル?…」

操縦席のシルヴィアが、苦々しげに呟いた。リゲル?とは、『エターナル・アース』の主力MTで、当然、世界最強の機動兵器だ。……俺は、この前の世代（リゲル?）としか交戦、及び操縦経験がない。

「…やはり、敵の狙いはこの『ベテルギウス』か、……やるしかない」

だが、彼女がそう決めたときにはもうすでに、敵機は40ミリライフルをこちらに向けていた。ドリルで道路を削るような発射音が出て、鉄の弾がはきだされた。

俺はもう駄目だと思って、目を覆った。直後、コックピット内を激震が襲った。しかし、コックピットに弾丸が飛び込み、爆発するようないことはなかった。

「…生きてる」

頬をつまみなくなるぐらい、俺は生きていることが信じられなかった。一般に、MT同士による戦闘は、先手必勝だと言われている。それは、MT自体が、装備している火器に

対して、その装甲があまりにも脆弱だからだ。ライフル銃なんかを至近距離でたたき込められたら、もちろん装甲は穴だらけになるはずなのだ。

「…高電磁フィールド展開完了」

シルヴィアは、わが意を得たりとばかりに楽しそうに続ける。

「その名の通り、電導性の高いローレンティウム装甲の表面を高電磁力で覆うシステムだ。あらゆる実弾兵器は、電磁力でその威力を大幅にそぎ取られる」

要するに、機体の表面を電気エネルギーの膜で包み込んで、物理攻撃によるダメージを軽減させると言ったところだろう。

「さあ、今度はこっちの番だ。行くぞ」

操縦桿を握るシルヴィアの顔は、これから闘いに赴こうという戦

士の顔、そのものだった。

ベテルギウスが、その左足を前に出した。次に右足を出そうとする。しかし、まるで初めて二足歩行した子供のように、突如バランスを崩してうつ伏せに倒れこんでしまった。

「ふん、ご立派なのは装甲だけみたいだな。中のパイロットはへなちょこと見える」

外部スピーカーから、敵のパイロットの嘲り声が聞こえた。

なめるなーと叫んで、シルヴィアは、機体を立ち上げようとした。しかし、立ち上がってすぐ、今度は横向きに倒れこんでしまった。MTの操縦は、バランス感覚が非常に重要で、感覚を掴めない何度やってもこけることになる。

「動け、動けよ。なんで、うまくいかないんだ？」

シルヴィアが、苛立ち気味に操縦桿を叩くが、白色の機体は答えられなかった。茶色の敵機が、超電導ナイフを構えて近づいてくる。超電導ナイフとは、電気力で硬質下する金属を使ったMTの接近戦装備だ。戦車の装甲すら、熱したバターののように断ち切ってしまう。

「…シルヴィア。その高電磁フィールドとやらは、近接武器に対しては…」

「まったくの無力だ。くそ、立て、立ってくれ」

シルヴィアの叫びもむなしく、ベテルギウスは立ち上がろうとしなかった。

このままじゃ、二人ともやられる。ここまで来てそんなのは嫌だ。……彼女を死なせるわけにはいかない。俺は、横から操縦桿を握った。

「…シルヴィア、そこをどいて。…たぶん、俺のほうがうまく動かせる」

「…いくら、お前でもそれは不可能だ。MTの操縦は…」

そんなに簡単なものじゃない、と彼女は続けたかったのだろう、

俺も、そのことは重々承知していた。

「…昔、実戦で三ヶ月ほど、俺はMTを操縦していた。嘘じゃない」

彼女の目が大きく、見開かれた。こんな状況じゃなかったら、間違いなく信じてもらえなかっただろう。

「お前、いったい…？」

「それは、後だ。来るぞ、早く変わってくれ」

茶色のリゲル？は、もう目前にまでせまっていた。

「覚悟はできたか？遺言があるなら、聞いてやるぞ」

敵機のパイロットは高笑いし、その余裕が致命的なミスだったとは、気付きもしなかった。

「…遺言？必要ないな。それよりも怪我しないように、しっかりしがみついてな」

「…若造が！死ねえ！」

リゲル？が、超電導ナイフを突き出してきた。その動きは、直線的で緩慢だった。満足に機体を歩かせられない素人パイロットには、それで十分

だと思ったのだろう。

操縦を代わった俺は、それを両手ではさんで受け止めた。金属同士がこすれあう耳障りな音がして、敵のナイフが止まった。…MT版白刃取りだ。

「そんな、馬鹿な…」

敵機のパイロットは動揺していた。そこに付けこまない手はない。はあー、俺は掛け声とともに、寝転がったまま、敵機に足払いをかけた。茶色の巨体が、音を立てて転倒した。そのすきに、機体を立ち上がらせ、敵機の頭部に

拳を叩きこんだ。スパーク音がして、頭部の一つ目が爆発した。一つ目は、カメラとセンサーの役割をしていて、いわば、MTの五感全てだと言える。

それゆえ、目も耳もない状態では、抵抗される恐れはない。

「…これで、一安心か…っう」

MTの運動は、急加速、急減速の連続だ。それゆえ、操縦者にかかってくるGは半端なものではない。

背中を熱い液体が伝っている。無論、汗などではなく、傷口からあふれ出てくる熱い血だ。

もって、あと五分、いや三分か、と俺は熱病にうなされたような意識下でそう思った。

「…大丈夫か？」

俺が苦しい顔をしていたためか、シルヴィアが心配そうに聞いてきた。

「…全然平気さ」

やせ我慢もいいところだった。大量出血で、頭はくらくらで、手はがくがくに震え、体中を悪寒が走っていた。

「…俺の心配よりも、こいつのエネルギー切れを心配するべきだな…。高電磁フィールドなんて張ってたら、すぐエネルギー切れをおこすんじゃないか？」

MTの動力は電力で、そして、それはファントムという物質の中に蓄えられている。MTのエンジンとは、究極的には、ファントムから電力を取り出して活用する装置である。それはつまり、乾電池で走るラジコンカーと同じで、貯蓄電力を使い切ったら動かなくなるということだ。敵前で動かなくなったらMTの末路なんて考えたくもない。

「…それに関しては大丈夫だ。画面の端をみてみる。あと3時間は動く」

彼女の言うとおりであった。画面の端に予想活動可能時間2時間56分とあって、動力源は…、

「ファントムリアクターエンジン…！」

驚きのあまり、目をこすってしまった。

「…それが、どうかしたのか？」

「いや…、こっちの事情…」

心の中で、白髪のお婦人に謝っておいた。もし、生きて再会できたら、きちんと謝ろうと思う。

「とりあえず、外に出よう」

俺は、MTを動かして、先ほどリゲル？が突入してきた穴から外に出た。ちゅうおうど、グランドのはずれの方に出た。

グラウンドのど真ん中に、教室の窓から見た大型の輸送ヘリが3台とまっている。いずれも翼を広げたような鳥を、幾何学的な模様が囲んでいる紋章を付けていた。

間違いなく、『エターナル・アース』のものだった。

ミサイルの直撃した校舎は瓦礫の山と化して、また、いたるところで火の手があがっていた。

俺たちがさっきまで授業を受けていた学校は、そこだけ前線地帯の光景と化していて、目を覆いたくなるような惨状だった。

「…攻撃が来る。よけるー！」

唐突に、シルヴィアが叫んだ。

……しまった、と思ったときにはもうすでに、コックピットに激震がはしり、瞬時に画面がブラックアウトした。頭部のカメラとセンサーをやられたらしく外界からの情報が入ってこなくなった。

「…頭部カメラをやられたか」

意識が途切れそうなふちにあったとしても、完璧に油断していた。俺は、短く悪態をついた。

「…なんで、高電磁フィールドがあったの…はずだ？」

とそこまで言っただけ、彼女は、しまった、という顔をした。

「電磁波がカメラやセンサーを邪魔するから、そこだけ覆わないんだっただけ…」

「…大丈夫だ。手はある」

俺は、コックピットハッチを開いた。鮮やかな空の色とお昼時の日差しに一瞬、くらっとした。

これでコックピットはまったくの無防備状態だが、少なくとも視界は蘇った。

「…その白い機体のパイロットに告げる。今すぐ、機体から降りて投降しろ。これ以上の抵抗は無意味だ」

威圧的な女性の声が、接近してくる紅い機体から聞こえてきた。その手には、対MT45ミリマシンガンが握られていた。……さっきの攻撃を仕掛けてきたのは、こいつか。

俺は、横目にシルヴィアの顔を窺った。無論、彼女は首を縦には振らず、その目は、断固抗戦と言っていた。

「…投降はできない」

短く、こちらの意志を向こうに伝えた。すると、紅い機体は、マシンガンを構え、

「…交渉決裂か。ならば、破壊するだけ！」

と言って、発砲してきた。俺は、ハッチが開いたままで無防備なコックピットを、腕を交差させて守った。高電磁フィールドが働いて、敵の弾は『ベテルギウス』の装甲に触れると即座に、失速して弾かれてしまう。

敵機は、マシンガンの弾が弾かれるのを見て、一瞬、ひるんだようだったが、すぐに態勢を立て直し、腰にさしてある筒状のものをつかんだ。その筒の先端から出た赤い光が刀身を描く。

「ヒートブレイドか…」

あの赤い光は、熱エネルギーそのものだ。あれにかかれれば、鋼鉄の板でさえ、バスターのように切り分けられる。通称、光剣と呼ばれる、現在MTの標準的近接用装備だ。

紅い敵機は、地面を蹴って突撃してくる。

「…早い。リゲル？の比じゃない…」

迫ってくる紅い機体の速さは、俺の知っているあらゆるMTをはるかに超えるものだった。喻えるなら、鈍重なゾウと、俊敏なカモ

シカとぐらいの差があった。その機体の形状はリゲル？のようにごつごつしておらず、むしろこの機体、『ベテルギウス』に近似していた。

敵の光剣の、赤い光が目前に迫った。とっさに、腰部の敵と同じ武器、ヒートブレイドに手が出そうになった。

「…駄目だ。これじゃ威力が強すぎる」

ヒートブレイドには手をのばさず、俺は、機体を後ろにジャンプさせることで、コックピットを狙った敵の横なぎをかわした。

深紅の機体、紅龍の中で赤毛の大佐は、驚きを禁じ得なかった。この機体自体、3か月前に連合から、奪い取った最新鋭のものはずだった。敵新型機の不意を突き、頭部カメラを破壊したまではよかった。

しかし、そこから、コックピットを開いてまで、抵抗し、あろうことか、必殺の一撃をも、かわしてみせたのだ。

「…機体の性能か、それともパイロットの腕前か…？」

しかし、骨の髄まで軍人である彼女は、そこで考えるのをやめた。下手な思考は、身体のあるいは判断のキレを鈍くする。

「いずれにしても、次で仕留める」

彼女は、短く息を吐いて、精神統一を図った。

そして、再びヒートブレイドを構えて機体を突撃させる。

ううつ、背後へのジャンプによるGで意識が飛びそうになる。

こちらが息を整えるなど待つてくれるはずもなく、深紅の敵機が、すかさず、また踏みこんで来た。俺は、慌てて胸部マシンガンで応戦した。

「…当てられない、なんて速さだ」

「お前、なぜこっちもヒートブレイドを抜かない？ 敵の間合いに

翻弄されるだけだぞ」

苛立ちげに、シルヴィアは言った。反射的に、ヒートブレードをつかもうとした

だが、『もう、誰も殺さないで』と言ったあの子の、シンシアの言葉が脳裏に蘇って、つかめなかった。

再び、横なぎが襲ってきた。今度も、機体を後ろに飛ばした。だが、紅い敵機はヒートブレードを振り切らず、途中で止め、投げ槍みたいに投げてきた。空中で、まったくの無防備状態にあったベテルギウスに、赤い光が迫ってきた。

きゃあ、と叫んでシルヴィアは、俺の腕にしがみついてきて、そのまま気絶してしまった。

「…ここまでか」

俺は、死を覚悟した。

目の前を、一条の光が貫き、目前にまで迫っていたヒートブレードが爆発した。

爆風がコックピットを襲って、一瞬息ができなくなった。

「…いったい何があったんだ？」

「…どこからの狙撃だ」

紅龍のパイロットは、必死にレーダー画面上で目を凝らした。

「熱紋照合…。半径1キロ圏内に該当する機体なしか…」

彼女は、すぐに先ほどの光がレーザー兵器によるものだと思ひ、熱の痕跡をたどって位置を割り出そうとしたのだ。

「半径2キロに拡大…。該当機なし…」

「中佐、敵の援軍がそろそろ来る頃です。負傷者も何名かおられますし、撤退を進言します」

彼女のもとに、歩兵部隊の指揮官から通信が入った。

「…分かった。撤退する。歩兵部隊をヘリに搭載し終わったら、

へりは離脱だ」

「了解しました」

「…それから、私の部隊でMTを失った者が一人いる。忘れずに回収してくれ」

「は、無論であります」

彼女が命令し終わると、ただちにへりは離陸して行った。すでに撤退準備は完了し終えていたようだった。

敵の紅い機体はしばらく周囲をうかがっていたが、閃光弾を打ち上げて飛翔し、離脱していった。

今まで現れていなかったが、他に四機ほどのリゲル？も離脱していった。

「…ガーガー、聞こえるか、白いやつのパイロット。正義の味方が助けにきてやったぜ！」

語尾に！がつきそうなくらい、ハイテンションな声が、無線から聞こえてきた。

「…おーい、どうした？ちびっちまって、声も出せないのか？」

「…聞こえているよ、…エルヴィン・ホークアイ」

この無線越しに聞こえてくるふざけた口調の主は、俺の旧知の人物だった。

「…その声、飛鳥、久遠飛鳥なのか？」

やたら、うれしそうな声が返ってきた。

そのとき、うーんと言って、シルヴィアが目を覚ました。

「…しかし、飛鳥お前生きていたとはなあ」

「きゃあ！」

俺の腕にしがみついていた彼女が驚いて上げた叫び声だった。

「…きゃあ？」

不審そうに、エルヴィンが尋ねてきた。

「気のせいだ、うん、聞き間違い」

「…この変態！何触ってるのよ！」

そっちからしがみついてきたのに、なぜか俺が変態扱いされた。

「飛鳥、まさかお前…、女の子と二人乗りか…？二人乗りなんだな。くー、うらやましい」

それ自体は間違っていないんだが、この後、一生おちよくられそう
な、あるいはネタにされそうな嫌な予感がした。

「まあ、とりあえず助けに来たんだし…、南の空にご注目」

言われた通り、機体を南に向けると米粒みたいな小さな点が見えた。

だが、その米粒は近づいてくるにつれて、まったく米粒なんかではないことが分かった。

「…戦艦が空を飛んでるだと…」

俺から距離をめいっぱい取っていた、シルヴィアは絶句した。

目視できる範囲での長さは200メートル、横幅も40メートル弱はあった。その先端は鋭く尖っていて、両翼を鳥の

ように広げていた。その艦の上で、灰色のシルエットがこっちに向かって手を振っていた。

連合の主力MT『ウェズン？』で、

「…連合軍浮遊戦艦、『エンディミオン』だ。どうだ、驚いたか？」

エルヴィンのは、まるでお気に入りの玩具を自慢する子供のよう
に得意気だった。

「…ああ、…すごいな」

敵が去り、味方の援軍？が来てほっとしたらしく、俺の意識は途
切れそうになっていた。

「おいおい、何だよ、そのリアクション。もっと感動しろよ、
艦が空飛んでんだぜ。そこらへんのガキがこれ見てたら、

感動のあまり今晚寝れなくなるってレベルなのによ」

「…そうだな」

やべえ、限界だ…。俺は、自分の意識が遠のいていくのを感じて

いた。あの少女の顔が近づいてきた。それは、幻覚かそれとも本物だったか

分からなかった。『今、行くよ。シンシア』、と心の中で彼女に告げて、そこで俺の意識は途切れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2826s/>

メタル・トゥルーパー

2011年11月15日08時23分発行